

〈論文〉

在日ブラジル人若年層の使用する 日本語における形態的統合

重 松 由 美

はじめに

在日ブラジル人コミュニティでは、ポルトガル語と日本語の接触による彼ら独自の変種を観察することができる。その一つの特徴が日本語からの語彙借用である。移民集団による言語転換は一般的な現象であるが、その過程において、定住化傾向にある在日ブラジル人が両言語を混合し、その子弟たちが母語も日本語の言語能力も十分ではない「ダブルリミテッド」の状態に陥るといった問題が深刻化している。これまで、日本に居住するブラジル人をめぐる言語研究は社会学の視点からなされてきたものがほとんどであり、これらの研究はほぼ成人を対象にしたものであった。日本社会への同化のための日本語教育やアイデンティティー確立のための母語維持の重要性が注目される近年において、若年層の在日ブラジル人の日本語使用を社会言語学の観点から分析した研究は極めて少ない。

本稿では、日本のブラジル人学校に通う生徒の日本語使用の中でも語彙借用に注目し、借用語のポルトガル語への形態的統合における変異パターンを分析するとともに、借用の生起理由を言語内・外的側面から考察する。新語形成の基準との比較を通して借用語の言語的構造の特徴を明らかにし、そして彼らの日本語使用において借用の選択を決定づける要因から借用の生起過程の解明を試みる。

I 資料

1 研究対象者

本稿の研究対象者は、エスコラ・アレグリア・デ・サベール Escola Alegria de Saber 豊田校（以下、EAS と記す）に在籍する5年生から10年生までのブラジル人生徒101人（男子生徒51人、女子生徒50人）である。彼らは、来日時においてはわずかな日本語能力しかもっておらず、現在に至っても6割強の生徒は日本語をわずかにしか理解できない状況にある¹⁾。来日前の日本語の習得方法に関しては、半数の生徒が家庭内や職場などの教育機関以外で言語接触を通して獲得している²⁾。来日後の正式な機関での日本語学習も、ほとんどの生徒は当校での週1回45分の授業だけである。つまり、彼らはブラジル人コミュニティ内で同母語話者の日本語を耳から模倣し、それを習慣化させている。このように「実生活」環境での習得は、ある程度のコミュニケーションの成立が目標であるため、不完全な言語知識の習得のままで満足し、結果としてその変種は化石化する可能性は高い。従って、借用語の変種パターンの解明は、彼らが日本語学習において両言語の構造的な違いをメタ言語的に気付くことができるという点からみても意義あるものである。

2 資料

本稿のデータは、筆者が当校においてスペイン語を教えていた2005年4月から12月にかけて、学校内での生徒の言語運用の観察と彼らとの自然談話、そして彼らに実施した日本語借用に関するアンケートとインタビューから得たものである。インタビューでの設問は、「先週末に何をしましたか」、「夏休みは何をするつもりですか」など日常生活に関するものである。また、アンケートの回答のほとんどがローマ字で記入されていた。用例の表記方法としては、アンケートの回答はその表記を抜粋してイタリック体で記す。インタビューや観察参与により確認された例はカタカナで記す。「 」内には日本語訳を記す。

3 Lexical Borrowing と Code Switching

本稿で借用語を扱う意図を明確にするうえで、言語接触により生じる代表的な2つの現象である Lexical Borrowing (「語彙借用」、以下 LB と記す) と Code Switching (「コード切り替え」、以下 CS と記す) を定義づける。多くの学者たちは、CS は1つの発話での2つ以上のコードの使用であり、LB は L2 の語彙アイテムが L1 にある程度音韻的・形態的に同化したものであると区別しているが、その同化の基準にはぐらつきがある。本稿では、両者の区別を話者の言語能力と借用語の言語的統合の程度を基準にして以下のように定義する。

(1) モノリンガルによる使用

LB は、L2 の語彙的アイテムが L1 の談話において L1 の形態と統語的規則に従い、一つの文法システムのもと使用されている語彙である。一方、CS では各々の一言語の断片は一つの言語において語彙的、形態的、統語的に正しい。つまり、LB とは、L1 の文法の「わく」の中への L2 の語彙のはめ込みであり、言語能力の乏しい話者でも用いることができる手段である。そして、CS は L1 と L2 の文法システムの知識を持っている話者が目的に応じて言語の二者択一を行う手法である。

(2) 言語的統合の程度

言語的統合に関して、CS と LB を区別する絶対的な決定基準はないが、言語的同化の程度は CS に比べ LB の方が明らかに顕著である。従って、本稿では、LB とは日本語がポルトガル語に転移され音韻的・形態的・統語的統合が行われた語彙であり、CS は言語的統合が認められない語彙の使用と定義する。単一単語の CS と LB を区別することは困難であるが³⁾、形態的統合が行われていない単一単語のうち音韻的統合が認められたものを借用語として扱うことにする⁴⁾。

表1 形態的統合が生じた名詞

接尾辞の添加	<ul style="list-style-type: none"> ・ <i>patinqueiro</i> 「パチンコをする人」 ← <i>patinco</i>+<i>-eiro</i> (語彙の行為者を意味する) ・ <i>tambozal</i> 「田んぼ」 ← <i>tambo</i>+<i>z</i>+<i>-al</i> (作物が栽培される場所を示す)
縮小辞と増大辞の添加	<ul style="list-style-type: none"> ・ <i>bakazinha</i> ← <i>baka</i>+<i>zinha</i> 「おばかさん」 ・ <i>tibizinho/a</i> ← <i>tibi</i>+<i>zinho</i> 「おちびさん」 ・ トーメイジーニャ ← <i>tomei</i>+<i>-zinha</i> 「距離の短い東名高速」 ・ <i>inakazão</i> ← <i>inaka</i>+<i>-zão</i> 「ど田舎」 ・ ハデゾナ ← <i>hade</i>+<i>zona</i> 「大変派手な人」
混種語	<ul style="list-style-type: none"> ・ <i>nihonguês</i> ← <i>nihon</i> (go) + (portu) <i>guês</i> 「日本語とポルトガル語の混用」

II 形態的統合

1 借用名詞に添加される接尾辞

借用名詞の語形成はポルトガル語の派生形成に従っており、日本語の意味に対応するポルトガル語の接尾辞が添加されている。表1に示したように、表現を補強するための縮小辞や増大辞の使用も観察された。特に、愛称や軽蔑表現として用いられる縮小辞の転移は、他の多くの言語にも認められる手法であり注目すべき現象である。

1) *Vou chegar rápido, porque vou pela* トーメイジーニャ.

「私は(距離の短い)東名高速を使って行くから、早く着くでしょう。」

2) *Estas meninas são uma* ハデゾナ.

「この少女たちはとても派手です。」

2 借用動詞の語形成

借用動詞の語形成には2つのタイプがある。ひとつは、ポルトガル語の「～する」を意味する *fazer* を助動詞として使用し、日本語の名詞をその目的語として混用する迂言的用法である。もうひとつは、日本語の語彙とポルトガル語の活用語尾を形態的に統合させた形式である。

(1) 「fazer+日本語の名詞」の迂言的用法

この形式は、借用動詞を形成する一般的な現象であることは理解できる。

3) Faz um *onegai* pra mim?

「お願いがあるのですか。」

4) Por que você faz *ijiwaru* pra (=para) mim?

「どうして私に意地悪をするのですか。」

その他の用例として、「fazer+ (*baito*, *kiukei*, *gohan*, *o souji*, *zanguyo*, *かたづけ*, *シュクダイ*)」が観察された。

(2) 「語幹 (日本語) + 語尾 (-ar)」の形態的統合

日本語がポルトガル語の新語形成における形態的規則に従い統合された借用動詞の確認された形態は11例と少ないが、借用動詞の形成パターンには規則性が見られ、「日本語+ポルトガル語の活用語尾-ar」と分析して表2にまとめた。

5) *Gambateia* nos estudos. 「勉強をがんばりなさい。」6) Vai faze (=fazer) o quê, *wakatou*? 「何するつもりですか、わかった?」

Ahm, *wakatei*, acho que nada, nande?

「あ〜、わかった、何も (しない) と思う、なんで?」

動詞の構造上の類似性が高い言語間であれば借用の生起は促進されるが、ポルトガル語と日本語のように言語構造の異なる言語間ではどのような変異パターンが存在するのか。まず、語尾について分析すると、確認された借用動詞の語形11例のうち、活用語尾として-arが使用されているものが10例、-erが1例であった。-arは最も造語力があり、前節要素を動詞化するため、ポルトガル語への他の言語からの借用語においても最も多く用いられている。例えば、ハーモン (Harmon 1994) で紹介されているポルトガル語におけるフランス語と英語からの借用動詞は、「名詞+-ar」の形式で構成されている: *blefar*←*blefe*+ -ar, *driblar*←*drible*+ -ar, *plugar*←

表2 形態的統合が生じた動詞

活用形 (確認された語形)	不定詞 (左記の活用形から導かれた語形)
<i>gambatei, gambatia, gambatiá, gambatio</i>	<i>gambatiar</i> (<i>gambati</i> 「がんばって」 + <i>-ar</i>)
<i>gambateando</i>	<i>gambatear</i> (<i>gambate</i> 「がんばって」 + <i>-ar</i>)
<i>gambateia</i>	<i>gambateiar</i> (<i>gambate</i> 「がんばって」 + <i>-iar</i>)
<i>gambatendo</i>	<i>gambater</i> (<i>gambate</i> 「がんばって」 + <i>-er</i>)
(その他… <i>gambatiano, kanbatei</i>) (単純語… <i>gambate, gambare, gambatte</i>)	
<i>wakatei, wakatou</i>	<i>wakatar</i> (<i>wakata</i> 「わかった」 + <i>-ar</i>)
(単純語… <i>wakatta, wakata</i>)	
<i>tsukaretei, tsukaretado, tsukareto</i>	<i>tsukaretar</i> (<i>tsukareta</i> 「疲れた」 + <i>-ar</i>)
(単純語… <i>tsukareta</i>)	
<i>tadamei</i>	<i>tadaimar</i> (<i>tadaima</i> 「ただいま」 + <i>-ar</i>)
(単純語… <i>tadaima</i>)	
<i>kimetei</i>	<i>kimetar</i> (<i>kimeta</i> 「決めた」 + <i>-ar</i>)
ドロベイ	<i>dorobar</i> (<i>dorobo</i> 「泥棒」 + <i>-ar</i>)
(その他… <i>dorobai, dorobaito</i>)	
ハンタリアード	<i>hantariar</i> (<i>hantari</i> 「反対」 + <i>-ar</i>)
<i>kensado</i>	<i>kensar</i> (<i>kensa</i> 「検査」 + <i>-ar</i>)

plugue+*-ar*。同様にワインライヒ (1976:93) も、「アメリカのポルトガル語に借入された英語の動詞は、通常その第一変化にしか配置されない」と述べ、例として *chinjar* (to change) と *jampar* (to jump) を挙げている。

次に語幹の語形を見てみると、言語構造上の類似性の高い言語間では不定詞が用いられることが多いが、日本語がポルトガル語に借入される場合は以下の品詞の形態で挿入される (動詞3例 [このすべてが「た形」]、名詞3例、間投詞2例)。名詞と間投詞は独立語としての性質が強いため、

受け入れ言語に取り入れられやすい。これは、同属言語から不定詞が語幹に挿入される理由と一致する。動詞「た形」に関しては、その使用頻度の高さが関係していると考えられる。久山(2000)は、ブラジル日系一世の使用する日本語におけるポルトガル語借用の研究において、動詞として取り入れる場合にポルトガル語の三人称単数現在形に「～する」を付加しサ変複合動詞をつくる(アジュダする←ajuda+「～する」)と紹介している。そしてポルトガル語の三人称単数現在形を用いる理由として、この活用形の使用頻度の高さを挙げている。本調査のアンケート結果でも、単純語として *wakatta* と促音が省略された *wakata*, *gambatte* と *gambate* 等が確認されており、各借用動詞で観察された単純語とその語幹の語形が一致している。つまり、日常よく使用される語形が語幹に埋め込まれ借用語を形成しているのである。

唯一、「がんばる」を意味する借用動詞 *gambatiar* は、確認用例数が多いにもかかわらず、その語幹と単純語 *gambat(t)e* の語形が異なっている。語幹の *gambat(t)e* の *e* が *i* になる理由として、二つの語(根)が合成する際に最初の語の語尾の母音が *i* となり接中辞の働きをすることがあるため(Sacconi 2001:92)⁵⁾、*gambat(t)e* の *e* が *i* となり活用語尾 *-ar* を結び付けていると説明できる。また、「がんばる」を意味する動詞の語形が4タイプ観察されたが、ポラック、サンコフ、ミラー(Poplack, Sankoff and Miller 1988)が述べているように、このぐらつきはバイリンガルが源となる言語の素材を忠実に再現しようとするため、コミュニティの他のメンバーのパターンから逸脱することに起因しているのではないか。確認された用例数が3例と最も多い *gambatiar* の語幹 *gambati* と比べ、1例ずつ見つかった *gambatear*, *gambateiar*, *gambater* の語幹は日本語の「がんばって」により言語的に忠実であると解釈することができる。しかし、後者の3つの動詞の使用者のうち1人は日本語知識が乏しいと答えており、話者の言語能力との関係は証明できない。

表3 借用名詞の文法上の性

共起する品詞	男性形	女性形
冠詞	<i>combini, gakoo, gomém, haizara, hon, inakazão, juice, keitai/keitai, meru, mukai, raita, sodi/souji, supa, tanbozal, toire, オフロ、オリガミ、カラオケ、100エン</i>	<i>bakazinha, hadezona, tibizinha, tomeizinha,</i>
所有形容詞	<i>aho, baka, kaban, keitai, key</i>	<i>baka</i>

3 文法上の性決定

借用名詞と共起する冠詞および所有形容詞から各語彙の文法上の性を判別し、表3にまとめた。

名詞の性決定の基準は、無標の性である男性と判断するという原則に従っており、形態的要素はあまり重要視されていない。女性形として判別される形態的特徴である語尾が-aで終わる語彙が確認されたが、すべて男性形として用いられている (*haizara, raita*)。その理由としては、借用語に対応するポルトガル語 (*o cinzeiro, o isqueiro*) の性別が採用されたとする解釈も可能であるが、容認度の低い語彙であるため⁶⁾無標の性である男性形として判別されたと考えるほうが自然であろう。

しかし、借用語に女性形の接尾辞が添加された場合は女性形と判断する確率が高い。例えば、*bakazinha, tibizinha, tomeizinha, hadezona* は女性名詞として用いられている。

4 統語的統合

借用をCSとの区別により定義したように、本調査で認められた借用語は統語的にもポルトガル語へ統合されている。ポルトガル語の基本文型S+V+Oの語順も、慣用句的に用いられる「動詞+前置詞」の組み合わせも変わっていない。

7) *Gomem pela demora*. 「遅れてごめん。」

8) *Estou meio nemui*. 「私は寝りかけている。」

9) ワカッタ isso? 「それ分かった?」

10) *Nani fazendo?* 「何をしているの。」

7)、8)、9) はポルトガル語の統語規則に完全に従っている。10) に関しては、慣用表現として用いられているが、ポルトガル語の構文として繫辞動詞 *estar* が欠如している。ブラジルでは、*está* を *tá*、 *você* を *cê* のように語彙を短縮して用いる現象が起きており、10) も文全体を短縮するために意味内容の乏しい繫辞動詞を削除していると考えられることができるが、ブラジルにおいて“*O que fazendo?*”のような繫辞動詞を省略する使用が認められていないことから、本稿において明確な説明はできない。

注目する点としては、*ne* の挿入が挙げられる。この語彙は、確認や同意を乞うために用いられる日本語の間投助詞「ね」もしくは同等の機能をもつポルトガル語で付加疑問を作る *né* (= *não é*) の二通りの解釈が可能である。ブラジルの日系二世・三世はポルトガル語を話す際に *né* を多用する傾向があり、これは日本語の影響であると考えられているが、本調査の *ne* の使用は *neh* での表記が認められたことと限られた語彙とのみ共起することから、日本語の「ね」を用いた定型化した表現であると理解できる。

11) Ah! *Gomen neh*, eu tava ocupada.

「あっ、ごめんね、私は忙しかったの。」

12) *Arigato né* por ter feito isso. 「それをしてくれてありがとうね。」

他の定型化した表現として、所有形容詞（間投詞的用法も含んでいる）を用いた例を紹介する (*Nossa gomen*. 「あっ、ごめん。」、*Seu/Sua baka!* 「バカ!」)。

5 混種語・翻訳借用・借用シフト

在日ブラジル人生徒の日本語借用において、先に紹介した混種語 1 例 (*nihonguês*) と、翻訳借用と借用シフトがわずかではあるが観察された。

13) *Vou entrar no ofuro*. 「私はお風呂に入ります。」

14) O meu braço tá (=está) *itai*. 「私は腕が痛い。」

13) の「風呂に入る」はポルトガル語では *tomar banho* を用いるのが普通であるため、*entrar em* の使用は日本語「～に入る」の直訳であることがわかる。14) の「～が痛い」の用法は、ポルトガル語では同じ意味を表す *estar com dor de* ～が存在するため、「estar+形容詞」の構文は日本語の「主語+繫辞動詞+形容詞」の影響であると考えられ、少なくとも統語的に完全にはポルトガル語に統合されていない。

また、意味的に広がって用いられる単純語の使用が確認された。

15) Quem é o *sodi/soji* hoje? 「今日の掃除当番は誰ですか。」

16) Esta canção é muito カワイイ。

「この歌はとてもすばらしい。」

17) O tempo de hoje é muito カワイイ。

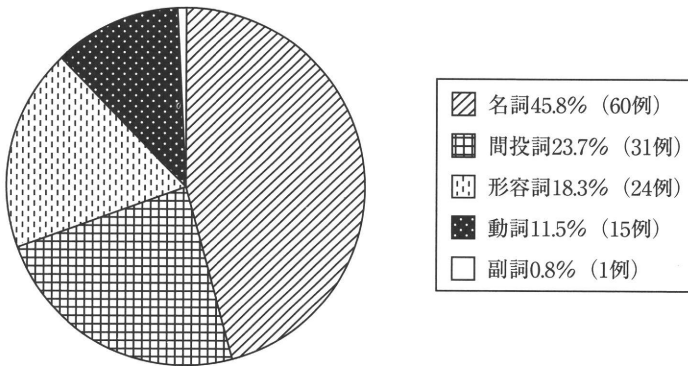
「今日はとても天気がよい。」

18) Até para fazer メンセツ é ムズカシイ。

「さらに面接試験を受けるのは、つらいです。」

15) の *sodi/soji* の意味範囲は日本語の「掃除」より広く、日本の学校で毎日行われる掃除を担当する生徒を意味する「掃除当番」まで含んでいる。EAS では生徒が授業後に教室を掃除するが、このブラジルには存在しない習慣を表現するために *sodi/soji* を借用し、本来の意味を拡大させて用いている。16) と17) の「カワイイ」は、この日本語に対応するポルトガル語 *bonito/a* がもつ「すばらしい」や「よい」の意味で用いられている。同様の現象が成人に対して行った日本語借用語に関するアンケート結果でも確認されており⁷⁾、18) の「ムズカシイ」はこの単純語に対応するポルトガル語 *difícil* が意味する「つらい」を表現している。これらの用法が個人的なものなのか、コミュニティ内で定着しつつあるものなのか、つまり誤用か借用シフトかの判別は本稿ではできないが、日本語「かわいい」と「むずかしい」の普及度が高いことから⁸⁾、日本語習得の観点からも注意して見ていかなければならない現象であろう。

図1 品詞別借用度



外来語とは異なり混種語、翻訳借用、借用シフトが少ない理由として、久山(1999)が指摘しているように、地理的要因が大きく作用していると考えられる。在日ブラジル人による日本語借用は、与え手側言語と受け手側言語の使用場所が一致し、同文化においての使用であるため、文化的ギャップを埋めるために混種語、翻訳借用、借用シフトなどの操作を行う必要がないからである。

Ⅲ 借用度と容認度

1 品詞別借用度

品詞別に借用度を分析し、それぞれの品詞の言語的特質と借用との関係を明らかにする。

ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) をはじめ多くの言語学者は、“borrowability” (借用度) の最も高い品詞として名詞を挙げている。名詞は独立語としての性質が強く、受け入れ言語に取り入れやすいためである。当調査の結果も同様のものではあった。図1に借用された語彙の品詞別借用度を示す。() 内に確認された用例数を記す。

(1) 間投詞

本調査の結果では、間投詞の借用度の高さが際立っている。間投詞も名詞と同様に独立性が高く、形態として未分析なまま受け入れ言語に取り入れられやすい。本稿で使用する間投詞とは、感動や応答・呼びかけ・挨拶を表す語で、活用がなく単独で文になるものを指す。そして、名詞や形容詞などから転用され間投詞として用いられている例も含む。例えば、“Fazendo *onegai*?” の *onegai* は名詞として機能しているが、“*Onegai, compre uma coca-cola pra mim?*” では間投詞に転用されており、この用例の *onegai* は間投詞に分類した。また、本調査で確認された名詞と形容詞はアンケートに単語のみで記入されたものが多いことから、実際使用される際には他の要素と構成して文を作るよりも、間投詞のように単独で用いられることが推測され、間投詞の割合は本稿の分析よりも高くなる可能性がある。

19) *Ele está gambateando*. 「彼はがんばっている。」

Eu gambatei. 「私はがんばった。」

20) *Tadaime!*. 「ただいま。」

21) *Kimetei*. 「決めた。」

また、19) の用例を除いて多くの借用動詞は1人称単数の(点)過去形のみで使用されており、動詞として認識されているのではなく、むしろ特定の人称時制での使用が間投詞として機能しているのではないか。単純語として観察された動詞には、*gambat(t)e*, *kankeinai*, *roshii*, *taberu*, *tigao*, *tsukareta*, *wakat(t)a*, *wakaranai*, かして、どいて、ねなさい、があるが、上記の語形以外の人称または時制での使用は確認されておらず、これらも間投詞として転用されている可能性が高い。

(2) 名詞

イナトミ(2005)の在日ブラジル人の日本語借用語使用に関する調査結果では、間投詞が全体の39%を占め、名詞の22%を上回っている⁹⁾。久山

(2000)においても、感動詞の借用割合は19.7%と二番目に高く注目されているが¹⁰⁾、名詞の借用発生割合は68.2%と極めて高く、本調査の23.7%やイナトミ (2005) の結果と比べるとその借用度は低いものである。これは、久山 (2000) のデータ量が他の研究よりも多いことや、それぞれの研究の対象者の属性の違いによるものであると考える。言語接触の期間の長さやブラジル社会への同化の程度などの影響により、日系一世たちはブラジル文化の内容をより深く理解できるようになり、日本語では表現できない事象と接する機会が増え、結果として名詞を借用する割合が高くなったと推測される。ワインライヒ (1976:76) も、名詞の借用語が非常に優勢である理由として、文法上・構造上の性質よりも、その語があるかないかという辞書的性質とその語の意味上の性質によるのでであると述べている。

(3) 形容詞

名詞と間投詞に続いて割合の高い形容詞は、すべて繫辞動詞の文 (主語 + 繫辞動詞 + 主格補語) の主格補語として用いられているが、これも名詞を修飾し名詞句を作る構造 (名詞 + 形容詞) と比較し、形容詞の独立語としての性質が強いからであると理解できる。また、日本語との語順の違い「形容詞 + 名詞」が名詞句としての借用を妨げている可能性もある。

22) *Esse bebezinho é muito kawaii.* 「その赤ちゃんはとても可愛い。」

23) *Hoje estou isogashi.* 「今日、私は忙しい。」

24) *Que razucashi fazer isso!* 「そんなことするなんて恥ずかしい！」

イナトミ (2005) で紹介されている借用形容詞の用例も繫辞動詞の文と感嘆文においての使用のみである。

Escrever 漢字 é muito 難しい. 「漢字を書くことはとても難しい。」

Esta doce está 美味しい. 「このデザートは美味しい。」

Que lugar 凄い! 「なんて凄い所なんだ！」。

表4 借用語の使用度と容認度

(借用動詞)					
不定詞	使用度	容認度	不定詞	使用度	容認度
wakatar	32.4%	54.3%	kimetar	9.8%	30.4%
gambatiar など	27.5%	51.0%	hantariar	9.7%	30.1%
tsukaretar	19.5%	39.8%	kensar	8.7%	28.2%
dorobar	11.8%	32.4%	tadaimar	7.8%	26.2%
(借用名詞)					
名詞	使用度	容認度	名詞	使用度	容認度
<i>bakazinha</i>	91.0%	96.0%	<i>nihonguês</i>	25.7%	39.6%
<i>patinqueiro</i>	45.6%	58.3%	<i>tambozal</i>	18.0%	33.0%
<i>tibizinho/a</i>	40.6%	63.4%	<i>inakazão</i>	9.1%	24.2%

2 借用語の容認度

ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) は、借用語使用を分析する上で、借用パターンを“nonce borrowing” (コーパスで一度だけ生じた語彙借用) と“established borrowing” (借用語として確立した語彙借用) の2タイプに区別し、社会レベルで語彙が普及する最も一般的な過程において使用頻度が大きく関わっていると述べている¹¹⁾。本調査で確認された借用語のほとんどが nonce borrowing に分類されるものであり、established borrowing に至るメカニズムを考察するためには、各語彙の使用頻度と容認度を考慮する必要がある。そのため、アンケートで確認された語彙をリストアップし、後日生徒に使用頻度についてのアンケートを実施した。その内容は、a.使わない、b.よく使う、c.時々使う、d.使わないが聞いたことがある、から選択するものである。表4に、形態的統合が確認された借用語の使用度と容認度を示す。ここで使用する使用度とは上記のbとcの合計割合であり、容認度はb・c・dの合計割合

を表す。

形態的統合が認められた借用語の使用度と容認度は、単純語のうち使用度と容認度が50%を示した割合がそれぞれ75%と95%であることと対照的に、ともに極めて低いものである。言語構造上の差異の大きい言語間において、形態的統合の生じた借用語を用いることは単純語の使用と比べ抵抗感が強い、つまり *established borrowing* として確立する可能性が低いことが数値をもって立証された。もうひとつ注目する点として、縮小辞の添加が認められた語彙の使用度・容認度がともに他の形態的統合が生じた語彙と比較し高いことが挙げられる。先に述べたように、移住による言語接触の状況下において愛称や軽蔑表現に用いられる形態素の転移は珍しいことではなく、本調査のブラジル人生徒の言語使用において特定の語彙に縮小辞を添加し借用語として使用する傾向を客観的に確認できた。

借用語としての定着度に関して、河野(2000)は複数標識-sの添加を高い定着度の基準としている。当調査では、25)の借用語の数が一致していない例と26)の性が一致している例が確認されたが、両者ともその容認度は低いという結果が出ている。

25) *Ele colocou os zapatos* ハンタリアド。

「彼は靴を左右反対に履いた。」

26) *Hoje eu tô (=estou) tsukaretada*. 「今日、私は疲れている。」

このような性数の一致・不一致は借用語の定着度以外にも、書き言葉と話し言葉の違い、形容詞が修飾する対象が自然性を持つか否か、生徒のポルトガル語能力そしてブラジルにおけるポルトガル語使用の状況²⁰⁾など、多くの要因が影響していることを考慮する必要がある。

IV 借用の生起要因

日本語の使用を決定付ける要因を言語的必要性と、社会的・文化的状況の2つの観点から考察する。形態的統合が認められた語彙数が少ないため単純語も扱い、借用の生起過程の解明を試みる。

1 言語内的要因

(1) 形態的類似性

ワインライヒ (1976: 67) は借用語の形態的統合が促進される要因として、言語構造の類似性と話者が直感的に似た語彙であると感じる認識を挙げている。言語構造上の差異が大きい両言語において、日本語借用語を違和感なく用いるため、活用語尾-ar や接尾辞を付加しポルトガル語に似せていると理解できる。もちろん、日本語にはない文法機能を補修し利便性を追及するという意図もあるが、それだけでは説明しきれない用例が観察されている。例えば、*tsukaretado/a* は *tsukaretar* 「疲れた」の過去分詞であるが、これはポルトガル語の「疲れている」を意味する *cansar* 「疲れさせる」の過去分詞 *cansado/a* に語形を似せたものであり、意味としては不適當な形態に活用させて用いている。*hantariado/a* も *hantariar* 「反対にする」の過去分詞であり、「反対の」を意味するポルトガル語の形容詞 *contrário/a* の影響よりも、ポルトガル語の過去分詞がもつ形容詞的用法の影響を受けている。また、*tambozal* の -al のような不必要な接尾辞の付加も、意味の強化以外にポルトガル語と形態的に似せるために生じたと理解できる。

(2) 文化的要因

ポルトガル語では適切に表現ができない日本の文化的用語の使用が多く確認された。ブラジルにも存在する物事の意味領域のずれを表現するためには、異文化で使用されている名称をそのまま借用するほうが新たに命名するよりも手間がかからないという理由は容易に理解できる。借用動詞の *gambatear* 「がんばる」と *tadaimar* 「ただいま (家に到着する)」はこれに対応するポルトガル語 *forçar-se* と *chegar* では行為の意味を十分に表現できない。借用名詞の *patinqueiro* はブラジルにはない「パチンコ」という娯楽の名称をそのまま借用し、ポルトガル語の「行為者」を表す接尾辞を添加し混種語を形成している。

2 言語外的要因

(1) 社会的要因

まず、形態的統合が生起する要因として話者の年齢因子について考察する。言語的類似性の低い両言語間では誤用により形態的統合が生起することは考えがたい。言語構造の異なる語彙を意図して統合するという行為は、言語接触の初期段階で観察される「異なる言語を混合することば遊び」と同質なものとして理解する。アンケートでの借用に関する意識調査では、「楽しい、遊び」と回答した生徒が12人と最も多く、このことから彼らの借用語の使用要因として遊び感覚が大きな役割を果たしていると考えられる。筆者が成人に対して同一のアンケートを行った際に、形態的統合が行われた混種語は *gambateá* の1例を除き確認されず、意識調査においても「楽しい」(2人)よりも「便利」(5人)の回答が多かった事実から話者の年齢と借用の関係は無視できないものである。また、筆者が生徒との談話で得たエピソードとして、バイリンガルの生徒が日本の公立小学校に通っていたときに、在日ブラジル人の友人間のみで通じる日本語とポルトガル語の混種語を創作していた話がある。その例として、*ateraretando*「当てられた」と *sabotamos*「さぼる」を紹介してくれた。ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) では、語彙革新は若年層によって盛んに行われ、彼らを経由して、隣接するグループにある程度普及し、ついに中年層に定着するという借用の形成過程を紹介している。つまり、ブラジル人生徒による個人的創作が、彼らの周囲にいる日本人とのつながりを持っていない成人に影響を与え、結果として借用語として定着する可能性は大きい。

次に、EASの生徒たちの社会的ネットワークを取り上げる。生徒たちが個人として形成するネットワークは、彼らの言語行動パターンやコミュニティの言語規範の成立と関係しているため、彼らが日常的にどこで、誰と、どのようなインターアクションを行うかを調べることにより、日本語借用が生起する過程が見えてくる。ナカミズ (1996) は、この「社会的

ネットワーク」を用い、人間関係の強度基準を「頻度」と「親密度」に定めて在日ブラジル人労働者の日本語借用を分析している。そして、借用語を使用する場を「職場内」と「職場外」に分け、ブラジル人労働者は日本人と接する「頻度」の高い「職場内」で日本語を習得し、「親密度」の高いブラジル人同士の「職場外」で日本語を借用すると彼らの言語使用を特徴づけている。本調査の借用語を使用する「場」についてのアンケート結果は、「学校」46人、「家庭」35人、「職場」28人であり、その他の回答は、「外出時（買い物、通院など）」7人、「教会」4人、「通信手段（電話、インターネット）」2人、「娯楽（映画、ゲーム）」2人であった。そして、使用する相手に関しては、「ブラジル人の友人」81人、「家族・親戚」36人であり、「日本人の友人」と回答した生徒は1人もいなかった。アンケート結果から、日本語を習得する場としてバラエティに富んだ日本語と接する「頻度」の高い「職場」が唯一挙げられるが、職場がブラジル人を対象にした飲食店であることが多いため日本人との接触は少ない。また、過去に公式機関で日本語を学習した経験者がわずかであることから、生徒たちは「学校」・「家庭」・「職場」でブラジル人バイリンガルから日本語を習得してきたと考えられる。特に形態的に統合した借用語を創造するうえで両言語の知識をもつバイリンガルの果たす役割は大きく、この点を考慮しても、モノリンガルのブラジル人生徒が用いる借用語はバイリンガルを通じてもたらされたと説明できる。つまり、ブラジル人生徒は言語コミュニティ内でブラジル人バイリンガルが使用する日本語の変種と高い「頻度」で接触し、「親密度」の高いブラジル人同士、特に「学校」の「友人」たちとその変種を用いるという言語行動パターンをとっている。その結果として、「学校」と関係の深い語彙が言語コミュニティの中で普及度を高めコミュニティの言語的規範が形成されている。このことから、借用語を用いる「場」が借用語の定着を決定づける重要な因子であることが明らかとなったが、言い換えれば、ブラジル人コミュニティ内でも所属する「場」が違えば借用語のカテゴリーも異なってくるという推論が成り立つ。

成人に対して行った同一のアンケートからもこの推論を肯定する結果が得られた。成人たちの回答では、「職場」と関連する用語や「家庭」で用いられる語彙は認められたが (*okane, shigotó, arubaito, teiji, yakin, rappu*, メンセツ)、ブラジル人生徒が使用する「学校」と関係のある語彙は観察されなかった (*sodi/soji/sooji/souji, nihongo, gakoo, hoikuen, hon, kaban, mukai*)。

最後に、借用語が用いられ始めた時期についても考慮しなければならない。借用名詞の多くが文化的必要性により生起していることから、これらは来日後にポルトガル語に導入されたと言えよう。しかし、生徒の多くはブラジルの日系社会に属しており、来日前に日本語との接触が皆無であったとは考えられない。筆者はブラジル在住中に、モノリンガルの日系二世・三世たちが日本語の呼称を頻繁に口にしているのを聞いており、これらの呼称が来日前もしくは後のどちらに借用され始めたかは本稿では断定できない。本調査の結果では呼称として *batchan, ditcham/ditchan, obatchan, anata, watashi* が確認され、各借用語の容認度は7割を超えている。また、この借用が呼称や親族呼称にまで及ぶ現象は久山 (2000) の日系一世のポルトガル語借用でも観察されており、外来語とは異なる移住による言語接触の特徴として注目すべき点であると取り上げられている。しかし、本研究のブラジル人生徒は一般の移民とは異なる社会的背景をもっており、彼らの来日前の言語使用を調査する必要がある。

(2) 心理的要因

ワインライヒ (1976:167) は、「多くの借用語リストに構造、文化的革新などの要因で説明の付くものを除いたあとにも、なお『情緒的借用』と呼ばれる語が残る」と述べている。田中 (1992) では、ブラジル日系人によるポルトガル語借用の要因として、日系人社会の緊張度が増すにしたがって借用語に面白味や侮蔑といった意味が付加され、異文化接触により生じる感情的ストレスを解消してきたと分析している。当調査においても、

ブラジル人生徒が直接接触の形で異文化に接することで生じる緊張状態や不安感を緩和する手段として「情緒的借用」を用いることが確認されている。

27) *Você está okanémoti.* 「君はお金持ちだね。」

27) は、ポルトガル語で “*Você está rico.*” と言えるが、あえて日本語を用い皮肉のニュアンスを込めて表現している。他にも、借用動詞の *tsukaretar* (*tsukaretado/a*) や *kensar* (*kensado/a*) がポルトガル語で同じ意味を表す *cansar* と *examinar* が存在するにもかかわらず用いられる理由は、面白みを込めて言うことにより日常生活や仕事から生じるストレスを解消しているのである。縮小辞・増大辞の多用も、言語の必要性以外に特別な伝達効果を加えるための一つ的手段であると理解できる。そして、先に述べた借用度において間接詞と形容詞の割合が高いのは共に情緒的カテゴリーに分類される語彙を多く含んでおり、借用が話者の感情表現の重要な手段として用いられていることの証拠である。

また、本調査では情緒的カテゴリーに属する語彙の否定的な意味合いを緩和するために日本語を借用している用例が多く認められた。容認度が7割以下の借用語67例のうち24例が否定的な意味をもつ語彙である (*aho, dorobar, ijiwaru, isogasi, itai, kankenai, kawaiiso, kitanai, kusai, mendokusai, muzukashi, omotai, osoi/ossoi, razukashi ronto, shine, shoganai/shouganai, takai, tibizinho/a, tsukaretado/a, tsumannai, uso, wakaranai*)。言語能力の乏しい生徒が容認度のそれほど高くない借用語をあえて用いる理由は、これらの語彙がもつ否定的なイメージを日本語で表現することにより和らげて伝え、コミュニケーションを円滑に進めるためである。つまり、借用使用がストラテジーとして機能しているのである。

イナズミ (2005) は、感謝の気持ちを表現する際に「ありがとう」を多用する理由として、ポルトガル語の “*obrigado/a*” は「ありがとう」よりも重く認識されていると記している。当調査では *arigato* は容認度の高い借用語ではあるが、日本語借用語をコミュニケーション・ストラテジーとし

て意識的に用いている実例である。筆者もバイリンガルの生徒から、「言いつらいことは日本語のほうが話しやすい」という意見を聞いている。

28) *Você é bacaiaro, ronto?!* 「あなたはバカですね。」

28) の *bacaiaro* はポルトガル語の *bobo* や *besta* で置き換えることができるが、その攻撃的な意味合いを和らげるために日本語を用い、文末に *ronto* 「本当」を加えて付加疑問文にすることにより、その効果を一層高めている。

そして重要な点は、この効果はいかなる「場」においても発揮できるものではないことである。社会的要因で述べたように、借用は話者が属する言語コミュニティレベルで使用傾向が異なるため、情緒的借用の効果を期待するならば共同体での言語的規範に従わなければならないのである。ポラック (Poplack 1980) では、言語能力の乏しい話者も感情表現の手段として用いることができる CS として「象徴的 CS」を紹介しており、この CS の効果は言語コミュニティの規範内で発揮されると述べている。また、ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) では、借用の中でも、特に *nonce borrowing* はコミュニティ・モードでなければならないと記している。つまり、日本語知識をもたないブラジル人生徒は、彼らが属する言語コミュニティの規範にそって日本語借用を行うことにより、自らの主観的印象を表すことができるのである。そして、容認度の低い日本語ほどその言語的規範に従わなければ、真の言語表現を実現できない。

この言語コミュニティの規範に従った借用語の使用はモノリンガルに限られたことではなく、ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) で指摘されているように、高度なバイリンガルによる借用においてもコミュニティ・モードは言語能力よりも優先される。その理由としては、先に述べたコミュニケーションを円滑に成立させるためであると同時に、ブラジル人生徒同士の連帯感を維持し自らのアイデンティティーを表示するためである。

V まとめ

在日ブラジル人生徒が使用する日本語借用語のポルトガル語への形態的統合における変異パターンを分析し、その生起理由について考察した。まず、形態的に統合が生じるパターンを品詞別にまとめる。

- ・名詞に関しては、ポルトガル語の接尾辞が添加された用例は観察されたが、接頭辞の付加は確認されていない。文法上の性決定の基準には一貫性が認められ、無標の性である男性形と判別されるが、女性形の接尾辞と統合が生じた場合は女性形として用いられる。
- ・動詞構造は「語幹+語尾」で形成されており、語幹には使用頻度の高い日本語の語形がはめ込まれ、ポルトガル語の無標の活用語尾である-ar と形態的に統合している。
- ・形容詞と副詞は、形態的に統合されにくい。
- ・統語的には、ポルトガル語の基本文型にはっきりと統合されている。

本調査の結果、借用語が形態的に統合する過程に作用している構造的基準は新語形成と一致する点が多いことが明らかとなった。異なる点としては、縮小辞の多用、借用語カテゴリーが基本語彙にまで及ぶ点そして混種語、翻訳借用、借用シフトが少ないことである。

では生起理由についてであるが、日本語にはない文法的機能を補うために形態的統合が生起した用例が少ないことから、両言語の言語的構造上の違いよりも文化的・社会的・心理的環境が借用の選択に大きな影響を及ぼしていることがわかった。特に注目する点は、借用がもつコミュニケーションを促進する機能とアイデンティティを維持するための使用が明らかになったことである。前者は、「情緒的借用」を指しており、ブラジル人生徒は自らが属する言語コミュニティの規範に従い日本語を借用することにより、自らの感情や態度を表し、人間関係を適切に維持している。後者は、言語能力に関係なくコミュニティ・モードで日本語を借用することを通して、他の生徒との連帯感を維持すると同時に自己を確立し、そして

表現している。本調査の借用語使用に関する意識調査では、生徒の7割以上が「特に何も感じない」、「便利」、「習慣」、「普通」と答えており¹³⁾、彼らが日本語彙を借用する言語運用は今後も継続されるものとする。日本語借用語の使用が在日ブラジル人の日本語学習を妨げているという現実がある一方で、ブラジル人としてのアイデンティティーを表示する手段として豊かな言語生活の現れであるとも評価でき、一概に彼らの借用語使用を否定的に捉えることはできない。在日ブラジル人の使用する日本語借用語がデカセギ語としてブラジルのコロニア語のようなアイデンティティーの表示になりうるかどうかを見極め、また借用の分析を彼らの日本語学習の促進に役立てるためにも、本調査で明らかとなった課題への取り組みと彼らの言語使用の継続的な調査が必要である。

註

- 1) 日本語習得状況についてのアンケートにおいて、a. 日本語に知識を持っていなかった b. わずかな知識を持っていた c. 十分な知識を持っていた d. かなりの知識を持っていた、これら4つの回答枠を選択した生徒数は以下のとおりである。[来日時] a. 86人 b. 32人 c. 0人 d. 1人 [現在] a. 23人 b. 51人 c. 33人 d. 6人 (無回答者あり)。日本語能力試験の級取得者数は、2級1人、3級7人、4級1人である。
- 2) 来日前の学習方法についての質問では、a. 学校 b. 家庭 c. 仕事 d. 独学の選択枠のうち、a. 25人 b. 15人 c. 4人 d. 1人 (無回答者あり、複数回答可能)であった。現在、EAS以外での正式機関での学習者は4人である。
- 3) ポラック、サンコフ、ミラー (Poplack, Sankoff and Miller 1988) は、単一単語のCSの指標としてメタ言語的注釈 (単語がL2であるか気付いていたか、即座の文脈でのいいよどみがあったか) を挙げている。
- 4) 在日ブラジル人若年層の使用する日本語借用語における音声的特徴に関しては、重松 (2006) を参照。
- 5) サッコーニ (Sacconi 2001) は例として、boquiaberto←boca+aberto と suaviloquência←suave+eloquênciaなどを挙げている。
- 6) *haizara* と *raita* の使用度は、21.4%と24.8%である。
- 7) 柔術の試験会場に来ていた成人19名 (男性11名、女性8名) の回答を得た。
- 8) 借用語 *kawai/kawaii* の容認度は81.8%、使用度は68.7%である。 *muzu-*

kashii は79.6%と61.2%である。

- 9) イナトミ (2005) は、「間投詞」のかわりに「感動詞」を用いているが、その定義付けは本調査の「間投詞」と一致するものである。他の品詞の借用度は以下のとおりである。形容詞28%、動詞7%、その他4%。
- 10) 久山 (2000) のその他の品詞の借用発生割合は以下のとおりである。動詞5.8%、形容詞2.9%、副詞3.4%。
- 11) 使用頻度の他に、借用語の社会的同化には、historical persistence (持続性) と degree of phonological integration (音韻的統合度) が影響すると述べている。
- 12) ブラジルポルトガル語の状況として、性数の不一致のほかにも、代名詞の不在や時制の不一致などが観察されている (参照、Roberts and Kato 1996)。
- 13) 意識調査に関する回答は以下のとおりである。「特になし」54人、「楽しい、遊び」12名、「便利さ」8人、「恥ずかしさ」7人、「習慣」2人、「優越感」・「自慢」・「普通」各1人。

参考文献

- イナトミ、クリスティーナ. 2005. 「日本に住むブラジル人の言語使用」(修士論文、名古屋大学大学院文学研究科人文学専攻)。
- 河野彰. 2000. 「在日ブラジル人のポルトガル語に見る日本語からの借用語」(国立国語研究所編『日本語と外国語の対照研究Ⅲ日本語とポルトガル語(2)』)、53-92ページ。
- 重松由美. 2006. 「在日ブラジル人が使用する日本語借用語における音声の特徴」(『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』第17巻第2号)、43-52ページ。
- 久山恵. 2000. 「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用：その形態と運用」(『社会言語科学』第3巻1号)、4-16ページ。
- 田中京子. 1992. 「借用語を産むもの：ブラジル日系人の日本語を通して」(カケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』)、173-184ページ。
- ナカミズ、エレン. 1996. 「日系ブラジル人労働者における言語生活」(国立国語研究所編『日本語と外国語の対照研究Ⅲ日本語とポルトガル語(1)』)、40-61ページ
- . 2000. 「在日ブラジル日系人若年層における二言語併用—文内コードスウィッチングを中心として—」(『徳川宗賢先生追悼論文集』、67-77ページ。
- ワインライヒ、U. 1976. 『言語間の接触—その事態と問題点— 神鳥武彦訳、岩波書店。原著 Uriel Weinreich, *Language in Contact - Findings and Problems* (The Hague: Mouton. 1974)。
- Harmon, Ronald M. 1994. “Aspectos lingüísticos dos empréstimos em português,”

- Hispania*, 77(3), pp.463–469.
- Milroy, Lesley and Li Wei. 1995. "A Social Network Approach to Code-switching: The Example of a Bilingual Community in Britain,". In Milroy, Lesley and Muysken, Pieter(eds.), *One Speaker, Two Language* (Cambridge: Cambridge University Press), pp.136–157.
- Poplack, Shana. 1980. "Sometimes I'll Start a Sentence in Spanish y TERMINO EN ESPAÑOL: Toward a Typology of Code-switching," *Linguistics*, 18, pp.581–618.
- Poplack, Shana, David Sankoff and Christopher Miller. 1988. "The Social Correlates and Linguistic Processes of Lexical Borrowing and Assimilation," *Linguistics*, 26, pp.47–104.
- Roberts, Ian and Mary Kato. 1996. *Português Brasileiro: Uma viagem diacrônica* (Campinas: Editora da Unicamp).
- Sacconi, Luiz Antonio. 2001. *Nossa Gramática: Teoria e Prática* (São Paulo: Saraiva).